

知っていますか？

通級 による指導

幼稚園、小学校、中学校、
高等学校、特別支援学校の先生方へ

このリーフレットは、指導の実際を紹介することで、
通級による指導について広く知っていただくことを
目的としています。



島根県における「通級による指導」

平成5年(1993)、通級による指導が制度化され、通常の学級で学ぶ子どもたちに対し、必要に応じて特別の教育課程を編成し、より適した指導・支援ができるようになりました。

これは、現在推進されているインクルーシブ教育システム構築の先駆けともいえ、共生社会の創造を志向しながら、子ども一人一人に応じ、多様性を尊重するかかわりを展開していくことを意味しています。

通級による指導は、通常の学級で学習しながら、障がいの状況に応じた専門的な指導を特別の場(通級指導教室)で受けることができる教育形態です。そこでは、障がいによる学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するための指導・支援(主に「自立活動」の内容)が行われています。

通級指導教室は、そこでの個別の教育活動において、教室担当者から通常の学級とは異なった「まなざし」で見つめられることにより、子どもが新しい自己を発見しながら自分らしく過ごすことができる場になっています。そして、そこで培われる教室担当者との信頼関係をベースにしたかかわりは、子どもの心の発達や、「自分」を知り「自分」を創っていく過程に、よりよい影響を与えています。また、あわせて行う保護者支援により、我が子と共に生きることに喜びを感じ、自分の人生を生きることもまた楽しもうとする思いにつながる取組を行っています。

島根の通級による指導は、かかわり全体を通して、自己信頼(自信)と他者信頼を育て、学びに向かう姿勢を育てているのです。

大切にしていること

島根県では、一つの通級指導教室で、通級による指導の対象となるすべての障がいの指導を行います。どの地域に住んでいても、すべての教室で様々な教育的ニーズに応じた指導を受けることができます。

子どもや保護者にとって、通級指導教室は身近な教室であり、いつでも安心して学んだり相談したりできる場となっています。

教室担当者は様々なニーズに応じたよりよい指導・支援を行うため、専門性の向上をめざして研修を重ねています。また、担任の先生方との連携をはじめ、子どもたちを取り巻く関係者との連携を大切にしています。

子どもたちの思いや願いを大切にしながら、自分らしく自信をもって暮らしていけることを願って、指導・支援を行っています。

目次

●指導の実際

構音障がい	P 1
吃音	P 2
言語発達のおくれ	P 3
自閉症	P 4
場面かん黙	P 5
弱視	P 6

難聴	P 7
LD(学習障がい)	P 8
ADHD(注意欠陥多動性障がい)	P 9
●幼児期における通級による指導	P 10
●高等学校における通級による指導	P 10
●理解・啓発活動	P 11
●学級担任と通級指導担当者の連携	P 11

構音障がい

日本語の語音は通常6歳頃までに発音できるようになりますが、口腔器官等に問題がなくても、発音できない語音がある子どもがおよそ5%いると言われています。そのほとんどが、カ行音（ガ行音）、サ行音（ザ行音）の発音が正しくできない場合や、[キ]、[シ]、[チ]などの「イ列音」の発音に歪みがある場合です。

発音の獲得には個人差がありますが、以下のような場合には、年齢にかかわらず「通級による指導」の相談を受けると良いでしょう。

- ・自分の氏名、好きな物や人の語音に発音できない音がある。
- ・ことばを言い換える、特定の音のことばで口をつぐむなど、発音できないことを気にしている様子が見られる。

事例

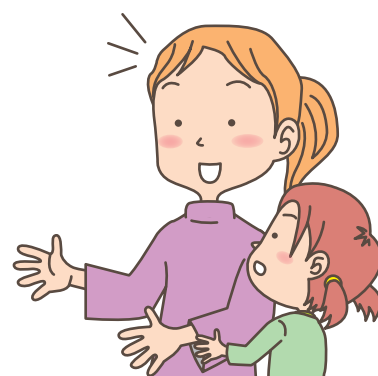
Aさんは発音できない音があって、話した時に相手から「えっ？」「もう一回言って」等の反応をされたことから、自分のことばを気にして人前で話したがないことがありました。保護者は幼児期からそんなAさんの様子を心配していましたが、「発音は成長とともに身につくのももう少し様子を見ましょう。」と言われてきたため、幼児期に発音の指導を受けることはありませんでした。

小学校に入学すると、保護者は読んだり話したりする機会が増えることを心配して、担任の先生を通じて通級指導教室に相談されました。その結果、入学後から通級による指導を受けることになりました。通級の時間はAさんにとって発音を獲

得するための練習をする時間であると同時に、会話ややりとりを楽しみながら学べる時間でした。毎時間発音のことを気にすることなくかかわってもらいながら、楽しい雰囲気の中で発音の練習を続けました。次第に正しい発音ができるようになってともに、自分に自信をもつことができるようになりました。ずっと通級に通いたいと思っていたAさんでしたが、発音を獲得して通級による指導を終えることになりました。

大切にしていること

- 子どもの「思い」に寄り添い、自尊感情を高めるためのかわりを基本にしなが、発音を獲得するための指導を行います。
- 器質的な面（聞こえ、息の鼻漏れなど）を確認し、必要があれば医療機関と連携して進めます。
- 発音を獲得するまでの期間、安心して暮らすことができる環境作りを行います。



保護者の声



「いつかは正しく言えるようになる」と思ってあまり気にしていませんでしたが、本人の気持ちを考えると、もっと早くに相談すれば良かったと思いました。通級では指導の見通しや家庭でできることなどを伝えてもらい、焦らず接することができました。発音のことだけではなく、子育ての悩みも聞いてもらえて安心しました。

吃音（きつおん）

話す時に、同じ音をくり返したり、音が伸びたり、ことばが出にくかったりするといった吃音の症状が見られる子どもが、100人に1人の割合でいると言われています。

吃音の原因や治療法は古くから研究されています。しかし、その原因を特定することはできていません。治療法はたくさんありますが、治癒する治療法は見つかっていません。

吃音の症状は人それぞれですが、内面に抱えている思いをしっかりと理解したかかわりが大切です。

事例

吃音のある人の中でも、吃音に対する見方・受け止め方は様々です。

- ・思うようにことばが出てこないことがあっても、いろいろな話を楽しそうにしてくれるBさん。
- ・「吃音があって良かったことは何ひとつない。」と言い切ったCさん。
- ・吃音を短所と考え悩み続けていたが、吃音のある仲間との出会いを通して、吃音を長所と考えることができるようになったDさん。
- ・中学3年生の夏休みに吃音という言葉に出会い、自分のしゃべりにくさの理由が分かり、ほっとしたと同時に悩み始めたEさん。

また、悩んでいる視点も様々です。

- ・音読やスピーチなど他の人より何倍も時間がかかることに悩んでいる人
 - ・上手く話せなかった時の周囲の反応が怖くて、安心して話せないことに悩んでいる人
- 周囲の理解やかかわり方で、子どもの気持ちを苦しめることもあれば、楽にすることもあります。

子どもの思いをしっかりと聞き、吃音を理由に子どもが本当に伝えたいことをあきらめてしまわないよう支えています。

大切にしていること

- 授業中、指名されるのではないかと常に緊張し、不安を感じている子どもがいます。通級指導教室では、そのような緊張や不安なく、吃音を気にすることなく会話を楽しみ、自分の思いをたくさん話せる場にします。（「一番ことばがうまく出ないと思うのはいつ？」との質問に「通級！だっていっぱいしゃべるから。」と答えた子どももいました。）
- 吃音のある自分自身を見つめたり、吃音についての知識を学んだりします。また、困っていることについての対応方法を一緒に考えます。
- 通級担当者は、「私は、話したい相手になっているのか？」と自問し、思うようにことばが出てこないことがあっても、一生懸命伝えようとしている子どもの思いを大切に、「話したい！」気持ちを育てます。



保護者の声



「吃音を治したい！」と思っていたころは、本当につらかったです。息子は、「治すことにこだわらず、吃音のある自分を受け入れる」という考え方や、同じ吃音のある先輩と出会ったことで表情が明るくなり、気持ちがとても楽になったようでした。

言語発達のおくれ

ことば数が少なく、話していることがわかりにくかったり、伝わりにくかったりする子どもは、他者とのかかわりにくさを感じている場合があります。ことばは、他者と同じ気持ちを感じ合い、つながり合う共感的なかかわりを通して育まれていきます。ことばを育むためには、子ども一人一人のそれまでの育ちや発達に応じて、気持ちに寄り添ったかかわりをするのが大切です。

事例

Fさんは4歳の男の子です。集団生活の場では、「かして」「かわって」等がことばで言えず、友だちに手がでてしまうことがあり、自分の思いがうまく相手に伝わらないもどかしさを感じているようでした。そして、ことば数の少なさ、やりとりのうまくいかなさといった保護者の心配から、教育相談を経て幼児教室（※）に通うことになりました。

幼児教室でのFさんは、自分から好きな遊びを見つけて、担当者と一緒に遊びを楽しみました。ことばの表出は少ないですが、担当者はFさんの気持ちが向いているものやその行動の背景にある思いを感じ、同じ気持ちになってその思いをこと

ばにして伝えるかかわりを行いました。やがてFさんが“あれ取って”“あれ見て”という表情や仕草を見せるようになると、担当者はこの思いに丁寧に応じていきました。すると、Fさんは自分が感じたことを一緒に感じてもらえることを喜ぶようになり、「おもしろいね。」と言って担当者と顔を見合わせて笑ったり、「〇〇しよう。」と自分から遊びに誘ったりするなど、担当者とのやりとりの中で表出されることばの数が増えていきました。

※県内一部の市町において、幼児を対象にした通級指導教室が設置されているところがあります。

大切にしていること

- 子どものことばや表情、しぐさの中にある思いを汲み取り、子どもの気持ちに寄り添う姿勢でかかわります。子どもの好きなこと（嫌いなこと）、得意なこと（苦手なこと）を知り、共感的なかかわりの中で、ことばを伝え合う経験を積み重ねていきます。
- 家庭や関係機関と連携を取り合い、ことばの育ちの土台となる、毎日の生活（食事、睡眠、運動等）を楽しみ、自分の思いを他者と伝え合い、やりとりを楽しむことで「こころ・からだ・ことば」が全体的に発達していくように支えます。



保護者の声



通級による指導を受けるようになって、Fの方から「〇〇して」ということが増えました。

また、ことばを話さないから分からないのではなく、子どもがどんな思いをもっているのかを分かろうとすることの大切さを改めて感じました。

自閉症

対人関係の形成が難しく、ことばの発達が遅れたり、興味や関心の幅が狭く、特定のものにこだわったりするという特徴のある子どもがいます。

その子なりの捉え方や感じ方があることを理解し、子どもに合った環境を整えながら、どうしたら安心して過ごせるかを考えてかかわることが大切です。



事例

Gさんはとても負けず嫌いの中学3年生の男子です。通級の時間には担当者を相手に、戦略的な要素の強いボードゲームやカードゲームで本気の勝負を楽しみます。たいていの場合はGさんが勝利をおさめますが、時には負けてしまうこともあり、そんな時には悔しくて怒りの気持ちでいっぱいになってしまうこともあります。

学級や部活動では、その場の雰囲気を考えない言動をとってしまうことがあり、「空気読めよ。」と言われてしまうこともしばしばです。自分が好きなアニメやゲームのことを一方的にしゃべり続けてうんざりされたり、相手が気にしていることをズバッと言って相手を傷つけたりすることもあります。反対に、誰かに言われた一言に深く傷ついて、いつまでも思い出しては怒りがぶり

返したりします。そんなGさんですが、好きなことには時間を忘れてとことん取り組めるという一面もあります。

通級では、まずGさんの話にじっくりと耳を傾けることを心がけています。気持ちの切り替えはGさんにとって簡単なことではありませんが、担当者が考えを押しつけずにかかわることで、やがて冷静に自分の言動を振り返ることができます。また、Gさんはことばを額面どおりに受け取ってしまうことがあり、それがトラブルの原因になることもあるため、担当者の考えや要望を伝える時は、なるべく具体的な表現で話すことを心がけています。

大切にしていること

- 子どもの思いを受け止め、やりとりの中で子ども自身が自分の気持ちを整理することができるようにしています。
- 伝えたいことは分かりやすい言葉で短く簡潔に伝えるようにしています。
- 周りがその子どものこだわりを理解し、長所として生かしていけるようにしています。
- 大きな音や明るすぎる光など強い刺激で気持ちが不安定にならないように、安心して過ごせる環境を整えます。
- 終わりの時間を知らせ、見通しをもって活動できるようにしています。

保護者の声



息子は通級の時間をとても楽しみにしています。通級の時間は、友だちとの距離の取り方や、怒りの気持ちのコントロールの方法などを学んでいるようです。私もときどき先生とお話することで、ふっと肩の力が抜けて子どもの目線に立って考えてみようと思うようになりました。

場面かん黙

家庭では普通に話をするのに、学校や園などの社会的場面では話すことができない状態を「場面かん黙」（選択性かん黙）と言います。それは「不安」によると言われています。話さないことで、自分の身を守りながら集団参加をしているのです。話すことを無理強いしないで、安心できる環境を整えることが大切です。

事例

Hさんは家庭では話をするのに学校ではひと言も話をしません。心配した母親からの相談で、通級指導教室に通うようになりました。

かん黙の状態は人それぞれです。かん動といって緊張で身体を動かすことができない子どももいれば、うなずきや音読だけはできる子どももいます。

Hさんは通級指導教室でかん黙についての説明を受け、初めて自分が「場面かん黙」であることを知りました。どのようにすることで暮らしやすくなるのかを担当者と相談し、自己理解を深めていきました。

社会人になったHさんは今もよく通級指導教室に顔を出してくれます。学校時代を振り返り、通

級の先生から「話せなくても大丈夫。」と言ってもらい、その時の自分を肯定してもらったことで“こんなことがしたい”と学校生活に意欲がもてたと教えてくれました。また、中学生の時に自分の苦しみに気づいてもらえたこと、大丈夫だと励ましてもらったこと等、通級の先生の存在が大きな救いになったことを話してくれました。

最近では、職場でも少しずつ話ができるようになり、現場のチームリーダーとして仕事をがんばっています。

大切にしていること

- 子どもがかん黙について理解し、不安を感じやすいことへの自己理解を深め、話さなくても自分なりの方法での集団参加することを認めます。
- どんな時に不安を感じ、どんな時に安心できるかの状況を理解し、学校や園において、子どもの不安が軽減されるように環境調整を行います。
- できたことやがんばっている姿を認め、自信がもてるようにします。
- 家庭においても、子どもの理解が図られるように情報を提供し、安心して子育てができるように支えます。



保護者の声



通級の先生に声をかけてもらい、かん黙の娘を連れて同じような子どもや保護者が集まる会に参加しました。苦しい思いをしているのは自分だけではないことに、娘も私も安心しました。今でもそこで出会った保護者さんとは連絡を取り合い、よく話をしています。通級指導教室でつながりを持ち、一緒に娘たちの今を支え合うよい仲間ができたことに感謝しています。

弱 視

さまざまな学習や生活の中で、見えにくさが原因でうまく学ぶことができない子どもたちがいます。

同じ程度の視力であっても、眼の状態によって、どんな見え方なのか、どんな支援が良いのかは一人一人違ってきます。

見えにくいとはどういうことなのかを十分に理解し、子どもの立場に立って支援することで、心理的な安定を図ることが大切です。

事例

Iさんは、小さいころから、見たいものに顔を近づけて見ていました。メガネをかけても小さい文字やごちゃごちゃしたものは見えにくいという、見え方の特徴がありました。

小学生になったIさんは、通級指導教室で、弱視レンズを使ってものを見る学習を始めました。弱視レンズは、ものさしの目盛や絵など手元の細かいものを見る時には「近用レンズ」、壁にかかっている時計や黒板など、遠いものを見る時は「遠用レンズ」と、二種類のレンズを使い分けます。

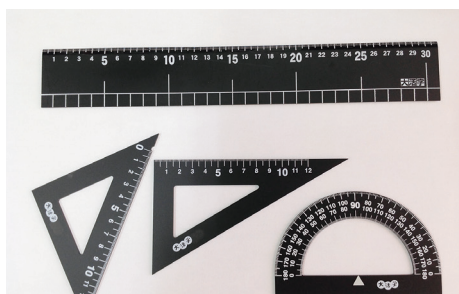
そして、「ピントをあわせる」「見たいものにレンズを向ける」「できるだけ速く読む」と細かいステップで練習しています。

弱視レンズを使うことに慣れてきたIさん。今日は、生活科の授業で身近な自然を観察します。近用レンズを持ち、友だちと一緒に元気に出かけていきました。



大切にしていること

- ・一人一人の「見えにくさ」について、子どもの思いを受け止め、悩みについて一緒に考えていきます。
- ・見る力を最大限に活用して学習していくために、弱視レンズ等の補助具を使いこなすための練習を繰り返し行います。道具を使いこなせることが、「見たい」「知りたい」「分きたい」といった学習への意欲を支えることとなります。
- ・小さいころは補助具を前向きに使っていたとしても、成長していく中で、“人と違うことをしたくない”と思うことがあります。そのようなときには、信頼できる大人と一緒に、子ども自身が自分の気持ちを整理できるように支えます。
- ・同じような見えにくさのある人との出会いを設けるなど、“こうありたい自分”を見つけるサポートをしていきます。
- ・特別支援学校（盲学校・浜田ろう学校の教育相談）や医療機関と連携し、子どもの見え方を評価した上での指導・支援が不可欠です。



～目盛りの見えやすい定規～



～弱視レンズ～

難 聴

難聴の子どもは、補聴器や人工内耳をつけても、他の子どもたちと同じように聞こえるわけではありません。一見困っていないように見えても、曖昧に聞こえた音やその場の状況などから推測して行動したり、聞こえているふりをして相槌をうったりしていることがあります。

周囲の聞こえる人と過ごす中で、不安や孤独感を感じていることを理解し、学習やコミュニケーションへの意欲を育んでいくことが大切です。

事例

補聴器をつけて生活している小学校2年生のJさんは、普段の会話では手話を使わず音声でやりとりをしています。授業中は周囲をきょろきょろ見て、不安そうな表情をしています。

通級指導の時間に、Jさんの気持ちを受け止めながら、学校生活のいろいろな場面を振り返りました。その中で、騒がしい時に先生や友だちの話が聞き取れなかったり、みんなが笑っている理由が分からなかったりして、不安な気持ちを抱えていることがわかりました。

そこで、聞こえにくい場面について話し合い、「早口だと聞き取りにくいから少しゆっくり話してほしい。」「放送の音が聞こえていないと気づいたら、教えてほしい。」など、Jさんの気持ち

や願いを知ることができました。そのことを担任に伝え、Jさんが願っていることを担任や当事者が実践してみる中で、Jさん自身が自分にとってよりよい支援について気づくことができました。

その後、担任の協力を得て、同じ学級の友だちに補聴器について知ってもらったり、Jさんの思いを伝える機会を作ってもらったりしました。また、他校の難聴の友だちと一緒に活動する機会を設け、難聴の仲間ができたことで、「自分一人だけではない」という思いをもつことにつながりました。

このような活動を通して、Jさんの表情は明るくなっていきました。

大切にしていること

- 聞こえ方は子どもによって異なります。難聴について理解したうえで、子どもの思いや気持ちを受け止め、肯定的に返していきます。
- 子どもが自分の生活を振り返る機会を持ち、自分の聞こえ方について知り、自分に必要な支援について考えていけるよう、支えていきます。
- 補聴器の装用に慣れ、自分に合った補聴器や補聴援助システムの使い方ができるように、一緒に考えていきます。
- 聞こえやすい環境を作るため、子どもの思いや希望を周囲へ伝えます。
- ろう学校や医療機関と連携し、子どもの聞こえ方を確認した上でかかわっていくことが大切です。



保護者の声



娘は、通級による指導の時間をいつも楽しみにしています。聞こえに関するだけでなく、いろいろな悩みを受け止め、一緒に考えてくださり、娘の気持ちの安定につながっていると思います。また、親の思いも聞いてもらい、親も支えてもらっています。

LD（学習障がい）

聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち、特定の能力に苦手さのある子どもがいます。どんなことが得意でどんなことが苦手なのかを理解し、得意なところを伸ばしながら支えていくことが大切です。

事例

Kさんは入学当初から読んだり書いたりすることが苦手でした。勉強が進むにつれて、漢字が正しく書けなかったり、板書に時間がかかったりすることが増えました。そのうち、学習に向かえず教室から退出したり、教室の後ろで一人粘土をしたりするなどの様子が見られるようになりました。学習意欲の低下が心配され、通級指導教室に相談がありました。

通級指導教室では、Kさんの得意なところを学習に生かしながら指導を進めたいと考えました。興味のある内容で漢字カルタに取り組みながら、漢字の形を意識したり、好きなアニメのキャラクターの名前を読んだり書いたりすることでカタカナを覚えやすくなりました。また、タブレットを使った学習にも取り組みました。「この方法だと分かりやすい。」と話をす

こともあり、「分かった」「できた」の思いが学習意欲につながっていきました。

また、「教科書に振り仮名をつける」「理解しやすい方法で先生に説明してもらう」など、日々の学習の学び方について二人で相談しました。

小学校5年生になったKさんは、通級で話し合った学習の方法を担当の先生や保護者に伝え、自分で考えた自分に合った方法で授業に臨んでいます。

ある日、担当者に「自分一人の力でテストをやり通したから、今日は満足よ!」と話しました。

そこに、自分に納得し、自分の今を受け入れ、前を向いていくKさんの姿がありました。

大切にしていること

- 通級指導教室で見つけた学びの方法（子どもの得意な学習方法や子どもに適した学習方法）を日々の学習の中で生かせるようにします。
- 担当者は子どもが自分のことを肯定的に受け止めることができるようなやり取りを丁寧に行うことで、自尊感情（自己肯定感）を高め、様々なことに挑戦する意欲を育みます。
- 子どもの様子や思い・願いを周囲（在籍する学級や学校、保護者等）に伝えて、安心して学習し、生活を送ることができるように働きかけます。



—漢字カルタを使った練習—

本人の声



先生が作ってくれたキャラクター入りのプリントをするうちに、カタカナを覚えていたよ。今までは漫画の吹き出しの言葉が読めなくて、漫画の絵だけを見てページをめくっていたけど、カタカナが覚えられたから吹き出しの言葉も読んでるよ。嬉しかったよ。通級に来て、自分がわかりやすい勉強の仕方を考えることは大事だなと思ったよ。

ADHD（注意欠陥多動性障がい）

気が散りやすくうっかりミスが多かったり、落ち着きがなく刺激に対してすぐに動き出したり、衝動的な行動で周りの友だちとのトラブルが多かったりする子どもがいます。

行動の背景にある思いをしっかり受け止めた上で、どうするとうまくいくかを子どもとよく相談し、自信を失うことがないようにかかわることが大切です。そのためには、周りの人の理解や環境調整（クールダウンできる部屋の用意、視覚刺激を減らすなど）を進めていくことが不可欠です。

事例

6年生のしさんは、小さいころから元気で人懐こい子どもでした。常に体がソワソワ動き、授業中もおしゃべりが止まりません。些細なことでカッとなり友だちとけんかになることも多く、先生から度々注意を受けてきました。反省はするけれど、同じことを繰り返すしさんに対して、周りの目は厳しくなっていました。

次第に勉強を嫌がるようになり、先生に反抗的な態度をとってしまったり、友だちの挑発に乗って人や物を傷つけてしまったりして、周りの人との関係が苦しくなり、教室を出ることが多くなりました。そして、5年生の時に通級による指導を受けることになりました。

しさんは、「通級は毎週、自分のために先生が来てくれるのがいい。」と話しました。通級の時

間は、学習に取り組んだり、得意な将棋や野球盤を楽しんだり、周りの人に対する不満や自分の弱音を吐き出したりして過ごしました。6年生の3学期になっても教室から退出する姿はありましたが、「これだけはちゃんとやるよ。」と自分で決めた活動には最後まで参加し、自分にできる役割を果たそうとする姿が増えました。「俺、中学校ではやるよ。」「将来は〇〇になる！」と少し先のことも話すようになりました。

中学校でも、通級や校内での支援を受けながら、学習や部活動に取り組むうちに、しさんが本来もっている行動力や明るさや優しさを理解してくれる先生や友だちが少しずつ増えてきました。そして、今は希望した高校に進学し、新しい環境でがんばっています。

大切にしていること

- 子どもなりの理由や感じ方、行動の背景にある思いを汲み取り、ことばや表情で返しながら信頼関係を築いていきます。うまくいかない自分を含めて、ありのままの姿を認められることで、自己肯定感を育てていきます。
- 力を発揮できる活動（好きなもの・こと）を学習内容に取り入れ、意欲や自信につなげます。そこでは、感情のコントロールやお互いに気持ちよく過ごせるふるまい方、他者の思いに心を寄せられる柔軟さを育み、集団の中での他者とのよりよいかかわりにつなげていきます。
- 子どもが自分を振り返る機会をもち、自己理解を促していくことで、今もっている力でできることやトラブルへの対処法を前向きに考えていけるようにします。
- 日々支える人（保護者・担任等）の悩みに寄り添い、子どもの存在を共に喜ぶことができるよう心のつながりを築いていきます。また、子どもの思いや願いを伝えることで、周囲の見方が肯定的になるように働きかけていきます。





幼児期における通級による指導

県内には、一部の市町において、幼児を対象にした通級指導教室が設置されているところがあります。子どもたちは、自分の通う園で生活しながら、週1回～月1回程度指導を受けています。

個々のニーズに応じて、個別指導やグループ指導を行います。子ども一人一人の興味や関心を大切にしながら指導を進めています。日頃から、在籍園の担任と情報交換を行い、お互いの指導に生かしています。

また、幼児期からの支援が就学後も継続して行われるように、小学校の通級指導教室や各関係機関との連携を大切にしています。



高等学校における通級による指導

県立松江農林高等学校

自校通級

2・3年時 1単位ずつ
放課後の時間帯
週1時間

県立宍道高等学校 (定時制課程)

自校通級

2～4年時 2単位ずつ
授業時間割内又は放課後の時間帯
週2時間
平成31年度から実施

県立瀬摩高等学校

自校通級

2・3年時 2単位ずつ
授業時間割内
週2時間

修得単位数を、年間7単位を超えない範囲で卒業認定単位に含めることができます。

指導内容の例と指導形態

学年	指導内容の例	指導形態
1年生 (試行)	○2・3年生の自立活動の実施に向けての事前指導 ・障がいの認識や自己理解を促す。 ・感情のコントロールやストレス対処のスキルを習得する。	生徒の実態や障がいの状況、指導内容に応じて、個別指導やグループ指導を適宜組み合わせて行います。
2年生	○ライフスキルトレーニングの実施 ・自己や他者を理解する。 ・効果的なコミュニケーションスキルを習得する。	
3年生	○キャリアトレーニングの実施 ・卒業後の社会生活に必要な知識やスキルを習得する。	

生徒の声



- ・悩みや不満、趣味の話など、話をたくさん聞いてもらえて嬉しいです。
- ・テスト勉強のスケジュールを立てることで、勉強の仕方がわかりました。今までどう時間を使っていいのかわからなかったのが分かっていませんでした。成績も上がり嬉しいです。
- ・インターンシップはみんな不安なんだとわかりました。働くことについて考えるようになりました。
- ・職場体験実習で、言葉遣いが心配でしたが、職場の人からはきちんとできていたという評価をもらえました。挨拶はきちんとしているつもりでしたが、職場の評価は「もっと積極性が必要」とアドバイスをもらいました。

理解・啓発活動

邑南町では、文部科学省委託「通級による指導担当教員等専門性充実事業」（H29～H30）の一環として、通級による指導の理解・啓発活動を行いました。瑞穂小学校、瑞穂中学校の通級指導教室担当者が町内各小中学校を訪問し、次のようなミニ研修会を実施しました。

研修内容

- 通級による指導の対象児童生徒
- 指導の開始手順
- 指導の形態
- 通級による指導の内容（自立活動について）
- 児童生徒の指導の実際（目標、内容）等



「児童生徒の指導の実際」では、その学校の児童生徒の指導のねらいや指導内容について具体的に説明を行い、通級による指導や児童生徒への指導について理解が進みました。

研修参加者の感想

- 通級指導教室は、子どもたちが「自分らしさ、もっている力、伸びようとしている力」を発揮できるように支えておられると思いました。だから通級に通っている時の子どもたちは楽しそうにしているのだと感じました。
- 個別の指導計画などをもとにした情報の共有が大切だと感じています。通級指導教室と在籍校が一体となって取り組んでいくために、こうした研修はありがたいです。
- 通級に通う子どもたちについての理解が深まったのと同時に、お互い（担任と担当者）が協力し合うことが大切だと感じました。保護者を含めた三者の共通理解も大切だと感じました。

学級担任と通級指導担当者の連携

通級による指導を受ける子どもたちは、1日の学習のほとんどを通常の学級で受けながら、障がいに応じた特別な指導（自立活動）を通級指導教室で行います。そのため、学級担任と通級担当者の連携は欠かせません。

お互いの情報交換を丁寧に行い、共通理解のもとで子どもの指導を進めることが大切です。通級指導教室での学びが学級の学習でも生かされ、担当者が学校生活の様子を知り、それを通級指導に生かしていくことで、お互いの指導の効果を高めることができます。



このリーフレットは、次の編集委員で作成しました。

・島根大学大学院教育学研究科	教授 原 広治	・松江市立揖屋幼稚園	教諭 谷戸 諒太	・江津市立青陵中学校	教諭 森川 和宜
・島根県立松江ろう学校	教諭 門脇 美佳	・安来市立十神小学校	教諭 中垣 彰子	・教育庁浜田教育事務所	指導主事 佐々本 茂
・松江市立母衣小学校	教諭 三井久美子	・出雲市立斐川西中学校	教諭 錦織 陽子	・教育庁特別支援教育課	指導主事 内田 育子
・松江市立古志原小学校	教諭 吾郷 典子	・飯南町立来島小学校	教諭 大野 順子	・教育庁特別支援教育課	指導主事 山崎真理子
・松江市立古江小学校	教諭 安部 満明	・浜田市立三隅小学校	教諭 岩本 美香		

島根県教育庁特別支援教育課

TEL / 0852-22-6710 FAX / 0852-22-6231

島根県教育庁特別支援教育課

検索

※幼稚園、小学校、中学校の通級指導教室に関しては、市町村教育委員会にお問い合わせください。